

婦人と子ども

第貳巻第六號

(明治三十五年六月五日發行)



(本欄は凡て轉載を禁ず)

樂隊の大勝利(つゝき)

やまとの翁

さても、驢馬と犬と猫と鶏と、四人づれで、又森
 を出て、遠い火を目的に、歩き出しましたが、近く
 なるに従い、だんく其火が明るくなって、側へ行
 って見た所が、これは此あたりの山賊の住家でした。

そこで、一番脊の高い驢馬が、そーつと窓の際え
這って行って、中をのぞきました。すると下から鶏
が、

「何か見えますか、驢馬さん」

驢「さよー、真中に、甘そーな御馳走を澤山并べて周
圍に山賊どもが大勢お酒を飲んでいるな」

鶏「へー、じやー、今に吾々も御馳走になれますね」

驢「そーさ、どーかしてあの座敷へ行きたいもんだな
」

それから、此四人が窓の下で、ひそくと相談を

して、どーにかしてあの山賊どもを、追い出そー
 とゆー工夫を凝らした。どーしよー、こーしよーと
 考えた後、とーく其計を考へ出した。先づ驢馬が
 前脚二本で、窓の椽に乗つかると狩犬が其脊中
 の上に乗る、次に猫が犬の上にかき上ると其次
 に鶏が猫の頭の上へ、飛び上って留る、さてこー
 ゆー具合に出来た所で、一二三の合圖で皆が一度
 に樂隊の合奏を始めた。

「ウー、ン、ヒ、ンヒンく」犬「ウーワン、ワンく」

「猫ニヤチーニヤチー」鶏「コニツケツコーく」

何^{なん}とも分^{わか}らぬ、不^ふ
思^し儀^ぎな恐^{おそ}ろしい大^{おほ}
きな聲^{こゑ}で一度^{いちど}に



や っ た も ん
だ か ら、 さ
ー 山 賊 共 わ、 吃 驚
仰 天 した。『そ ー ら
化 物 だ』と 思 っ て 腰
を ぬ か す や ら、 御 馳 走 を 引 っ く り 返 す や ら の 大 騒 ぎ て



皆んな散々になつて、森の方へ逃げて行つてしまつた。

さう、甘く行つたとゆゝので、四人わ、中に這入つて、たらふく御馳走になつて舌鼓をならして居る。

さて御食事が済むと、燈火を消してしまつて、皆

か眠よゝとゆゝことになつて、各自、持前の寢所に

付いた。即、驢馬わ、そこいらの藁の上に横になる、

犬は戸の後に、猫わおへつついの側の濇い所に、そ

して鶏わお座敷の中央の鴨居の上へ飛び上つた。朝

から、もゝ大分草勞れたもんですから、四人とも直

ぐ寝入って仕舞いました。

さて、夜中頃になると、先きに逃げて行つた山賊どもも、大勢で又どやくと歸つてきました。所が家わ眞暗で、寂して居る。そこで山賊の大將が、うにわ「さつき、あんなに大騒をして、狼狽るでもなかつたのじゃ」すると皆が、「さよーく何もありません。先づ念の爲にとゆーので、家の中を見廻りに行って見ると、家中丸で寂して居るから、燈火を附けよーと思つて、勝手の方え行くと、へっついの下に、ピカ

一リくくと猫の目玉が二つ光って居る、山賊は夫と
 は知らないから、之を消え残りの炭だと思つて、火
 を附ける積りでマッチを其目玉えくつ付けた、猫も之
 にわ驚いたです。目の玉えいきなりマッチをつきつ
 けられたもんだから、恐ろしく吃驚して其山賊の顔
 え不意に飛びかゝつて、爪で以て散々に引つ搔いた。
 眞闇の中で、此不意打に出遭つたもんですから、
 山賊又腰をぬかささん許りに吃驚して狼狽ふた
 めいて戸口の處え逃げて呉ると、そこに寢て居つた
 犬の尾を思入り履み附けたから堪りません、犬わ、

『ウーワッ』と言って賊の足え噛み附いた。賊わも一泣
 き出しそーになって 跛引きながら 藁の處まで來
 ると 今度わ驢馬が、驚いて後脚でイヤとゆー程
 賊の脇腹を蹴附けました。すると此騒ぎで、今迄鳴
 居の上に寝て居った鶏が、目を醒ましていきなり
 『コッケッコッコッケッコ』と鳴き出しました。
 賊わ這々の体で逃げ出して歸ると、大將わ待ち兼
 ねて、『こりや中わどーだった』と尋ねます、すると
 賊わ、

『どーの、こーのって親分、家内にわ大變なものが住

んで居ますよ　　まーこーです、私わたしがね、勝手かつてえ行つ
 て火ひを附つけかゝつた所ところが、恐おそろしい尖とがつた爪つめで、突いき
 然なり私わたしの顔かほを、此この通とり引ひき搔かいたんです、私わたしも吃ひっ驚くし
 て戸との處とこに逃にげ出でした所ところが、其處そこにわ又また人ひとが居ゐまし
 て、『ウウンコンラ』といつて、出刃で庖丁ぱうていを、私わたしの足あしに突つき
 込こんだ、それから、庭にわに來くるとどーでしよー、何なに
 者ものかゝ太ふとい棍棒こんぼうを以もつて、イヤとゆー程ほど、私わたしの横腹よこばらを
 喰くわせましたね、それからまだ恐こわかったのわ、何なん
 でも屋根や根ねの上うへでしたるー、大おほきなお化ばけの聲こゑがして、
 『とつて、食くをーか、とつて、食くをーか』と怒ど鳴なり出だし

ました、いや恐いの恐くないのって、生れてから始
 めてこんな目に遭った』

丸で顔の色もなくなつて 慄え聲で咄しましたか
 ら他の者共も一度に慄へ上つて仕舞つて、夫から、
 此山賊どもわ、も一二度と此家にわ來ない様になつ
 たもんですから、とうく四人の樂隊わ、甘々と山
 賊の住家を奪い取つて 何時までも安樂に此處に住
 うことになりましたとさ。めでたしく